



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	農家負債累積のメカニズム分析（その1）：農家負債累積の実態把握
Author(s)	淡路, 和則
Description	研究ノート
Citation	農業経営研究, 10, 103-114
Issue Date	1984-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/36415
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_103-114.pdf



農家負債累積のメカニズム分析（その1）

－ 農家負債累積の実態把握 －

淡 路 和 則

1. はじめに
2. 負債累積過程の把握
 - 1) 対象農家負債の概観
 - 2) 負債累積過程の類型
 - 3) 代表事例による考察
3. 今後の課題

1. はじめに

近年、「農業の装置化」「ゴールなき規模拡大」によって、多くの農家が返済できぬほど多額の負債をかかえているといわれている。

そして、この累積する負債の解消は、カレントな問題として農業関係者につぎつけられ、なぜ負債が年々累積してくるのかといった、「負債累積のメカニズム」の研究が必要になっている。

ところで従来、このような負債問題に関して、その総額の大きさでもって「負債累積農家」を考えることが多かった。しかし、負債残高の大きさのみで農家負債を評価するのでは不十分である。なぜなら、同じ負債といっても、土地・機械・施設などといった生産基盤の拡充のために資金を導入して発生したものもあれば、住宅の新改築といった生活基盤への投資から発生したもの、あるいは負債整理のために発生したものもあり、その内容は様々だからである。つまり、同じ負債額をかかえていても、主に生産基盤関連の負債が多い農家と、生活基盤関連の負債が多い農家とでは、性質が異なるのである。

従って、なぜ負債が累積するかといった問題を解明するには、まず、以前の負債を返済して行きながら、いつどのような資金がどのくらいの額で加わって負債が増えて来たのかといった累積過程をおさえてはならないのである。

そこで本稿では、負債累積のメカニズム究明の前段として、負債の性格を考慮してその累積過程の内実を把握することにした。

そのための考察は、北海道十勝のN村を対象にして、昭和58年に当教室が実施した農家経営調査の対象農家のうち、酪農経営（7戸）についておこなった。酪農経営を選んだのは、他の形態の経営に比べ固定資本投資が大きく、資金導入との関係がとらえやすいからである。対象期間は、昭和50年から58年とし、分析には農協の負債明細一覧表を用いた。

2. 負債累積過程の把握

1) 対象農家負債の概観

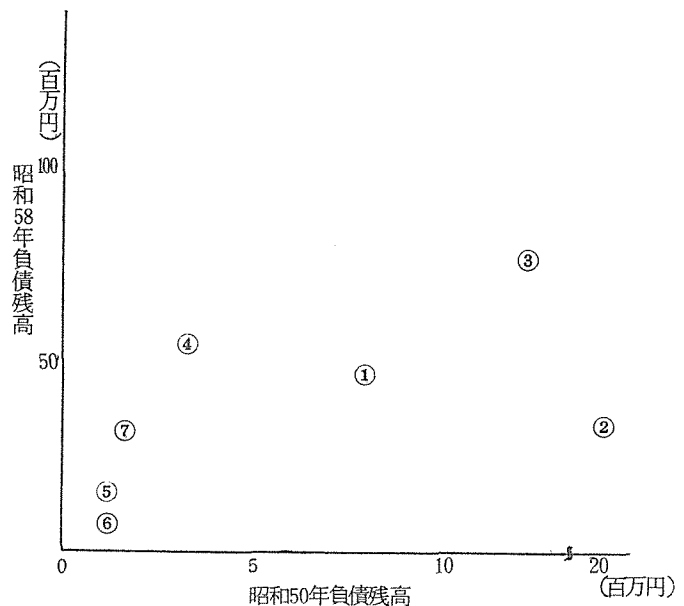
まずはじめに、対象農家の負債額とその増加の大きさについて簡単にみておくことにする。

第1図によって、昭和50年と58年の2時点での負債額とその増加の大きさを対象農家ごとに見ることができる。これによると昭和58年現在では、すべての農家が900万円以上の負債をもち、多いもの（③番農家）では約7,600万円の負債をもちている。そして、負債増加のテンポを見ると、②番農家を除いてあとはすべて対50年比で5倍以上の増加を示しており、なかには⑦番農家のように20倍もの増加を示すものもある。

②番農家は、昭和50年時点から負債額が大きく、増加の仕方も1.5倍と他の農家より小さい。

さて、ほとんどの場合、昭和50年から58年の間に5倍以上という大きさを負債額が増加したわけであるが、ではいったいその増えた中味は何であったのかを次にみてみたい。

第1図 対象農家の負債額（昭和50年，58年）



注) グラフ中の番号は農家番号

2) 負債累積過程の類型

第1表は、昭和50年から58年にかけての負債残高を2年ごとに示したものである。この数値は、農協の負債明細一覧表を用いて算出したものであり、各年8月31日現在の負債残高を示してある。負債の内訳については、使途が天災・住宅・負債整理⁽¹⁾関係と明確に判別できるものをそれぞれの区分に入れ、残りを生産関連とした。

この表の負債内訳ごとの変化を追って行くと、以下のようなグループにまとめることができる。

Ⅰグループ：①，②，③番農家

Ⅱグループ：④番農家

Ⅲグループ：⑤番農家

Ⅳグループ：⑥，⑦番農家

Ⅰグループは、3戸とも昭和51年に畑作酪農経営から酪農専業経営へと経営形態の変化があった農家である。⁽²⁾これらの特徴は、生産関連の負債が酪農専業化を契機として昭和50年から52年にかけて大幅に増加し、その後は横ばい、ないしは減少傾向であること。そして、それに対して負債整理の性格をもった資金が、昭和56年から58年にかけて大幅に増加することである。また、短期資金は、昭和54年から56年にかけて急増し58年に減少している。（こういった動向の意味づけは、次の代表事例の分析を通じておこなうことにする。）

Ⅱグループの特徴は、生産関連の負債が増加し続けること。昭和54年に短期資金が大幅に増加し、それ以降は減少傾向にあるが、負債整理の性格をもつ資金が56年から58年にかけて大幅に増加することである。それに住宅関連の負債も加わり、負債総額は急増することになる。

Ⅲグループは、天災・負債整理の性格をもつ資金がなく、生産関連の負債額も全体的に小さくおさまっている。負債総額が昭和56年から58年にかけて急増するが、その内容は生産関連と住宅関連であり、後者の方がはるかに大きい。また、短期資金は導入されていない。

Ⅳグループは、生産関連の負債が昭和52年に急増し、その後は減少して行く。このことはⅠグループと同様であるが、生産関連以外の負債が住宅関連であることに違いがある。また、Ⅲグループ同様、短期資金の導入はない。

以下は、負債の内容のちがいに着目し、その推移によって分類したグループごとの特徴を述べたものであった。次に代表事例を用いて、それぞれの特徴を考察する

第1表 対象農家の負債の推移

(単位：千円)

農家番号	負債内訳	昭和50年	昭和52年	昭和54年	昭和56年	昭和58年	備考
①	長期資金	125	—	—	—	—	総頭数 37頭 うち経産牛 25頭
	天 災 宅 住 宅 負債整理 生産関連 小 計	— 3,916 2,705 6,746	— — 3,128 24,484	— — 2,739 25,185	— — 7,321 21,956	— — 20,050 19,994	
	短期資金	1,250	—	2,124	9,423	4,460	経営耕地面積 16.3㌧ 昭和51年：畑酪→酪専
	合 計	7,996	27,612	30,048	38,700	44,504	
	長期資金	600	200	—	—	—	総頭数 91頭 うち経産牛 50頭
	天 災 宅 住 宅 負債整理 生産関連 小 計	— 5,722 9,700 16,022	— 6,301 23,817 30,318	1,346 5,751 19,615 26,712	1,118 8,469 14,675 24,262	863 21,097 8,934 30,894	
②	短期資金	4,969	3,915	2,550	9,140	1,645	経営耕地面積 25.1㌧ 昭和51年：畑酪→酪専
	合 計	20,991	34,233	29,262	33,402	32,539	
	長期資金	220	—	—	—	—	総頭数 70頭 うち経産牛 42頭
	天 災 宅 住 宅 負債整理 生産関連 小 計	— 1,935 4,599 6,654	561 1,873 29,144 41,578	435 1,629 37,494 39,558	293 1,139 36,330 48,014	133 3,156 38,155 69,855	
	短期資金	5,480	—	4,520	12,730	6,230	経営耕地面積 28.0㌧ 昭和51年：畑酪→酪専
	合 計	12,134	41,578	44,078	60,744	76,085	
③	長期資金	180	60	—	1,500	1,000	総頭数 61頭 うち経産牛 40頭
	天 災 宅 住 宅 負債整理 生産関連 小 計	— 865 2,201 3,246	— 754 4,638 5,452	4,949 631 8,253 13,833	4,737 9,144 13,216 28,597	4,492 3,070 14,629 50,821	
	短期資金	—	—	5,110	4,510	4,160	経営耕地面積 24.0㌧ 酪農専業
	合 計	3,246	5,452	18,943	33,107	54,981	
	長期資金	—	—	—	—	—	総頭数 24頭 うち経産牛 15頭
	天 災 宅 住 宅 負債整理 生産関連 小 計	— — 1,276 1,276	— — 1,595 1,595	— — 1,157 1,157	— — 640 640	1,110 — 3,400 14,508	
④	短期資金	—	—	—	—	—	経営耕地面積 23.0㌧ 畑作・酪農
	合 計	1,276	1,595	1,157	640	14,508	
	長期資金	—	—	—	—	—	総頭数 38頭 うち経産牛 18頭
	天 災 宅 住 宅 負債整理 生産関連 小 計	— — 1,166 1,166	— 4,500 8,903 13,403	— 4,188 8,636 12,824	— 3,841 7,959 11,800	— 3,454 6,544 9,998	
	短期資金	—	—	—	—	—	経営耕地面積 24.4㌧ 畑作・酪農
	合 計	1,166	13,403	12,824	11,800	9,998	
⑤	長期資金	—	—	—	—	—	総頭数 75頭 うち経産牛 46頭
	天 災 宅 住 宅 負債整理 生産関連 小 計	— — 235 1,339	— — 205 25,943	— — 171 25,803	— — 135 25,962	4,952 94 24,868 29,914	
	短期資金	—	—	—	—	—	経営耕地面積 33.0㌧ 昭和52年：畑酪→酪専
	合 計	1,574	26,148	25,974	26,097	29,914	
	長期資金	—	—	—	—	—	総頭数 75頭 うち経産牛 46頭
	天 災 宅 住 宅 負債整理 生産関連 小 計	— — 235 1,339	— — 205 25,943	— — 171 25,803	— — 135 25,962	4,952 94 24,868 29,914	
⑥	短期資金	—	—	—	—	—	経営耕地面積 33.0㌧ 昭和52年：畑酪→酪専
	合 計	1,574	26,148	25,974	26,097	29,914	

注) 備考の数値は昭和57年の値

ことにしたい。

3) 代表事例による考察

＜Ⅰ グループ＞ 代表事例：③番農家 （第2図参照）

このグループの特徴のひとつは、生産関連負債の急増、その後の横ばいないし減少であった。それは、酪農専業化（昭和51年）に伴い、畜舎・サイロ等を建てるために大型の資金をまとめて導入し負債を急激に増やすが、その後は返済額の大きさに相当するかそれ以下の額の資金を導入することによって、生産関連負債額の横ばい、ないしは減少状態となるのである、そのため、昭和55年の牛の購入、翌年の乾草庫導入といった多頭化の際にも生産関連の負債を増加させることがなかったといえる。だが、生産関連の負債は減少しても、昭和54年、56年と短期負債が増大している。これらは、酪農専業化時の急激な負債増加により各年度の要償還額の支払いが困難になったことや、機械等の導入によるものと考えられる。そして、その短期負債の増大が、56年以降、集中的に入る負債整理の性格をもつ資金と置き換えるのである。

以上みるように、このグループの負債額増大は、昭和50年から52年にかけての生産基盤拡充のための投資による増大と、56年から58年にかけての負債整理の性格をもつ資金による増大に分けて考えられる。両者は、前者によって年度要償還額が増大し、その支払不能の発生・拡大が起り、後者が現われていると考えられる。

また、第1図を合わせて考えてみると、他のグループより昭和50年時点での負債総額が大きく、その中で負債整理の性格をもつものの比重が大きいことがわかる。つまり、こういった状態で昭和50年から52年にかけて大型の投資をおこない、結果として負債整理を重ねることになって行ったのである。

＜Ⅱ グループ＞ 代表事例：④番農家 （第3図参照）

このグループの特徴は、他のグループと比べて、生産関連の負債が増加し続けていることであった。

④番農家は、経営形態の変化に伴う負債の急増は確認できないが、昭和52年の土地拡大（借地）、その翌年のサイロ導入、多頭化、そして55年・56年のパイプラインミルクカー、バーンクリーナーの導入と、一連の大きな投資がおこなわれている。それにともなって、生産関連の負債も返済があまり済んでいないうちに新しい資金が入り込んで来る形になっており、生産関連の負債は増加する一方となっているのである。

そしてここで特徴的なのは、こういった一連の投資が昭和54年以降、負債整理性の資金の導入と同時並行的におこなわれていて、負債総額を著しく増加させている点である。

その他、住宅の新築がこの生産基盤拡充期になされており、負債の増大にさらに拍車をかけていることを指摘せねばならない。

<Ⅲ グループ> 代表事例：⑥番農家 （第4図参照）

このグループの特徴は、生産関連の負債が低く抑えられており、負債の急増も多くは住宅関連の負債によるものであった。

⑥番農家においては、総頭数がほぼ25頭で一定しており、畜舎も昭和27年に建てたものを使っている。また機械の共同所有も多く、なるべく投資を抑えようとする姿勢がうかがえる。そのため導入資金の本数も少なく、しかも昭和52年で見られるように、返済額に見合う資金の導入をしていた。だが、昭和57年に、生産関連と住宅関連の資金の導入が同調して、負債総額をはね上げる結果になっている。

<Ⅳ グループ> 代表事例：⑦番農家 （第5図参照）

このグループの特徴は、急激な生産関連の負債の増大とその後の減少、そして、その他は住宅関連負債の増大であった。

また、昭和50年から58年を通してみても、負債の総額に他のグループよりも小さくなっていることが指摘できる。

⑦番農家は、昭和52年に酪農専業化しており、その際に畜舎・サイロ・パイプラインミルクカー等を総合施設資金で導入している。これ以外は、生産関連で新たに加わった資金は一本だけであり、それも昭和50年以前の負債の減少分とほぼ同額のため、総合施設資金の他は一定の水準になっている。従って、総合施設資金の返済が始まると生産関連の負債額は減少して行くことになる。

その他は、昭和57年の住宅新築のため住宅関連の負債が発生し、結果として負債総額は増加することになっているが、Ⅰグループで見られたような短期資金の増加、負債整理の性格をもつ資金の増加はない。

以上、各グループごとの特徴について述べてきたが、ここで整理すると次のようになる。

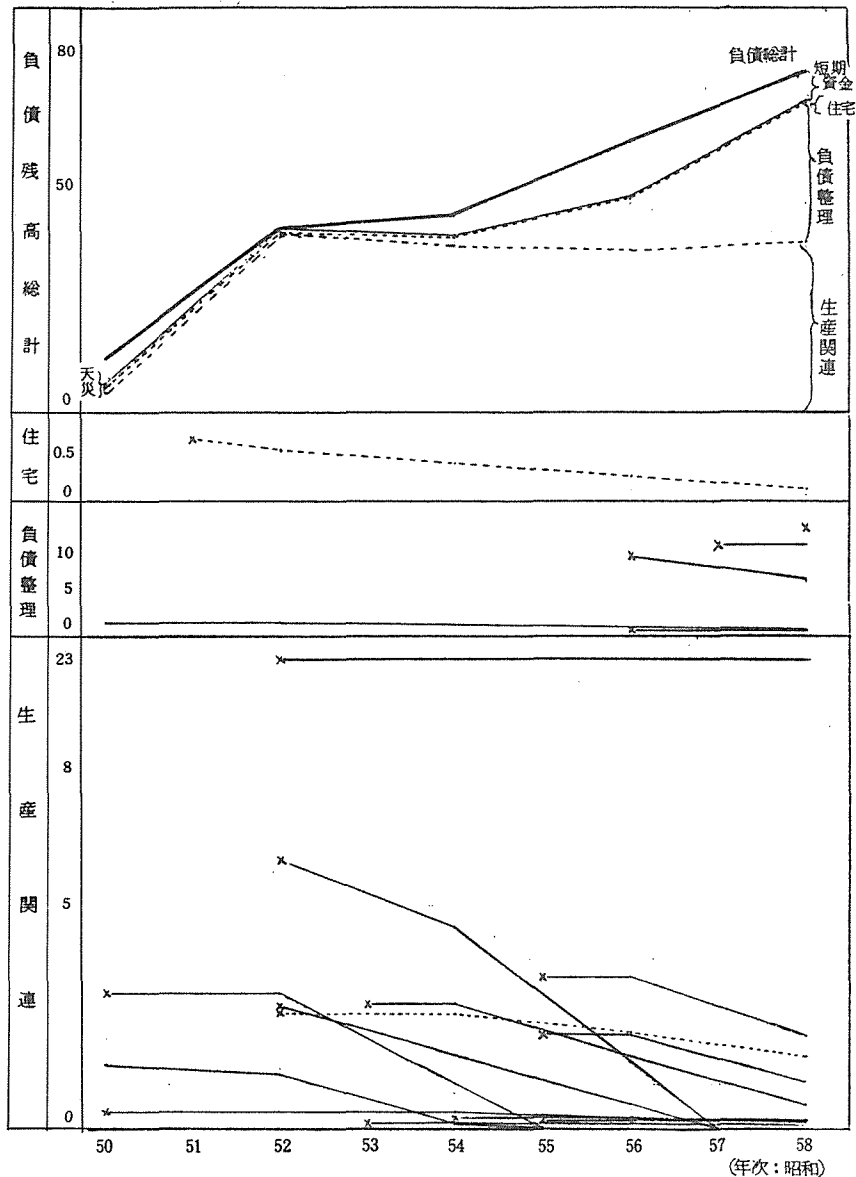
まず大きくいって、生産関連の負債のうえに負債整理の性格をもつ資金がかぶさ

って行くもの（Ⅰ、Ⅱグループ）と住宅関連の資金がかぶさって行くもの（Ⅲ、Ⅳグループ）とに分かれる。前者には、生産関連の負債が横ばい、減少して行くものと、それが増加し続けて行くものがあった。また、前者のⅠ、Ⅱグループと後者のⅢ、Ⅳグループを比べると、前者は昭和50年以前より負債整理の性格をもつ資金が存在することが多く、短期資金の導入も多いが、後者にはそれらがほとんど存在しない。これは、生産力・再生産状況の反映と考えられるが、その分析は今後の課題である。

また、以上の負債増加の中味を年次別に追ってみると、昭和50年から52年にかけての増加は生産基盤投資によるものであり、56年から58年にかけての増加は、負債整理（Ⅰ、Ⅱグループ）か、住宅関連（Ⅲ、Ⅳグループ）であった。

第2図 ③番農家

(単位・百万円)



- 注 1. ×印は資金の導入年次を表わす。
 2. ×印のないものは昭和50年以前の負債を合計したもの
 3. 最上段以外の欄の点線は利息6.0%以上、実線は6.0%未満を示す

第2図付表

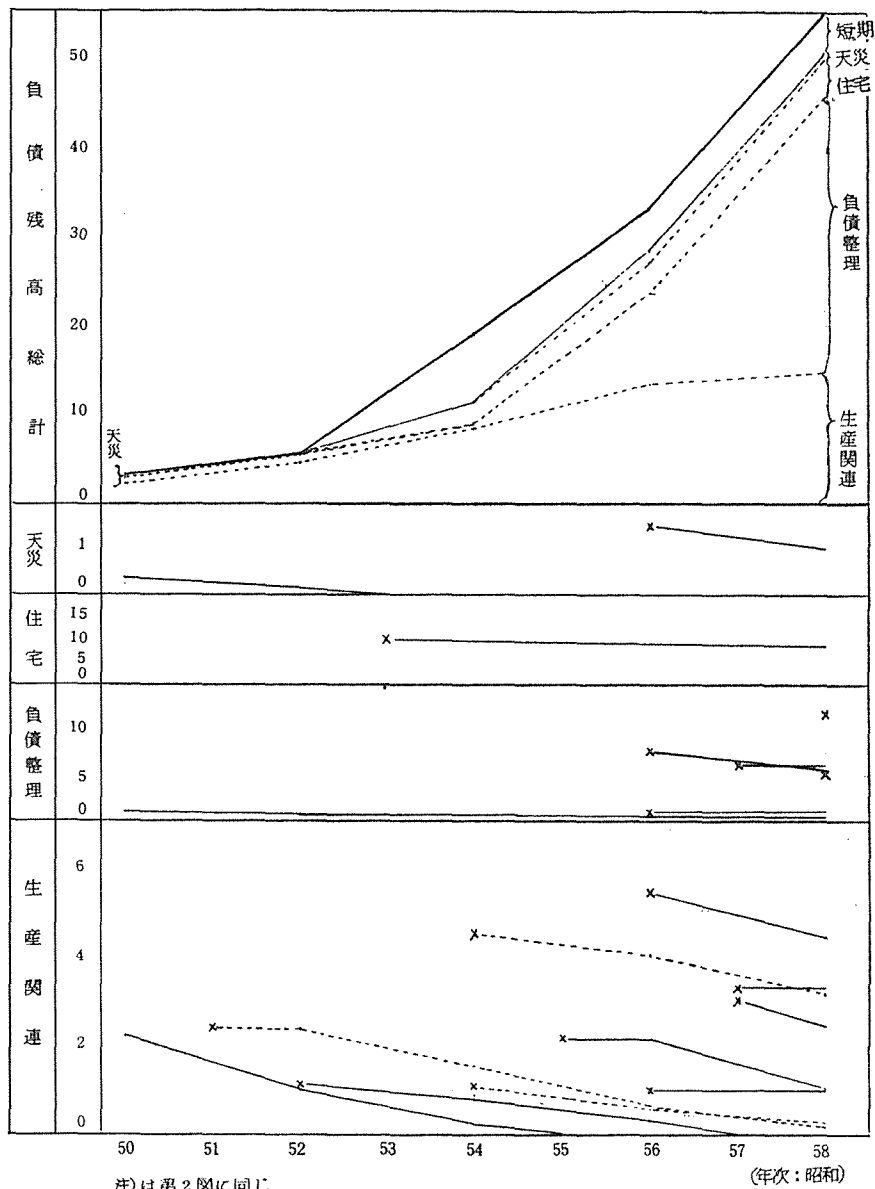
年	50	51	52	53	54	55	56	57	58
機 械			トラクター (1/1)	プラウ(1/1) トラック (1/1)	ロータリー ハロー(1/1) デスクモア (1/1)	ワゴン(1/1)	プランター (1/1) ブロードキャ スター(1/1)	テッター(1/1)	スプレーヤー (1/1)
施設		畜舎・サイロ	農機具庫				乾草庫		
土地		1.5ha開畑						傾斜地修正	
家 畜		酪専化 総頭数30頭				個体 10頭購入		総頭数70頭	

() 内は分子が台数、分母が所有農家数

第3図

④番農家

(単位・百万円)



注)は第2図に同じ

(年次:昭和)

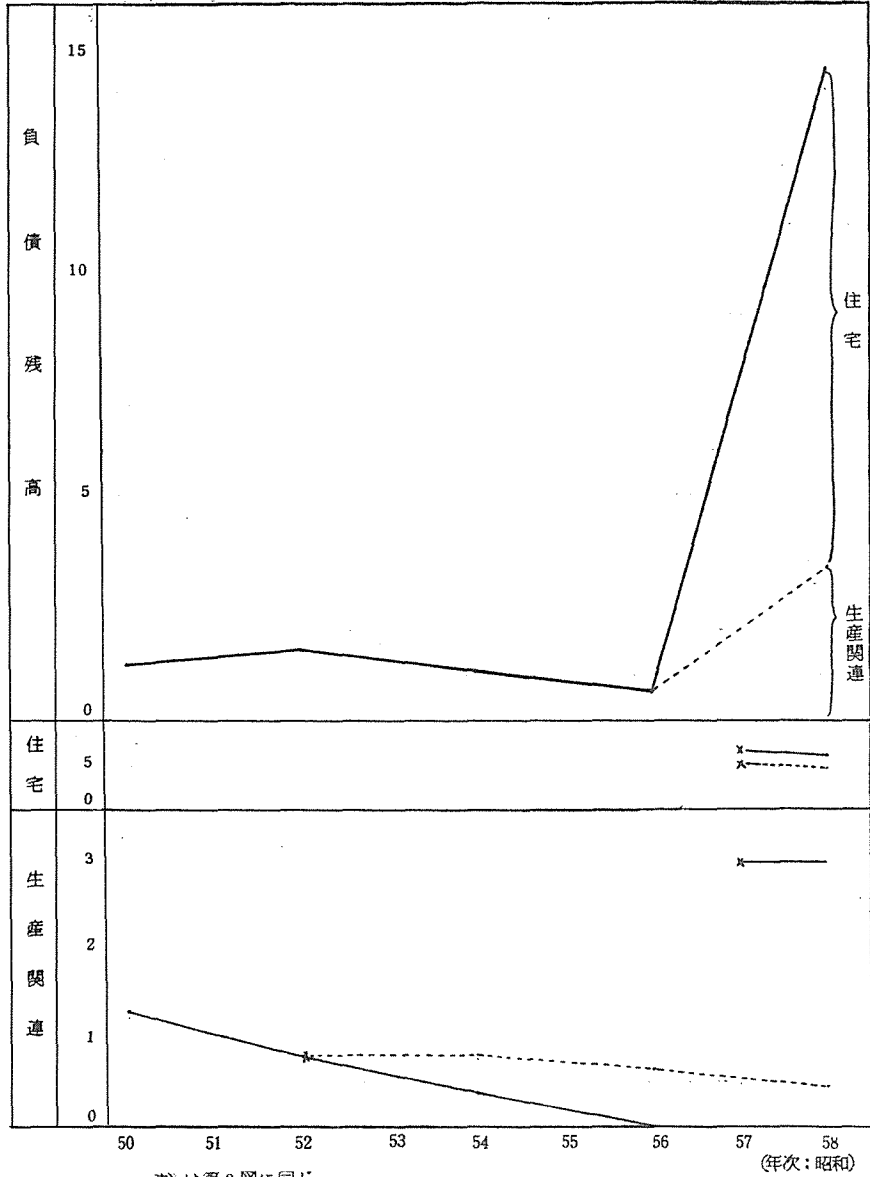
第3図付表

年	50	51	52	53	54	55	56	57	58
機械	ブロードキャスター (1/1) トラック (1/1)				カルチベータ (1/1)	ライムソー (1/1) モアコンディショナー (1/1) ヘイベラー (1/1) トレーラー (1/1)	ロータリー ハロー (1/1) プランター (1/1)	テック (1/1)	スプレーヤー (1/1)
施設				サイロ		パイプライン ミルク	バンクリーナー		
土地			4.0 4a借地						
家畜		40頭段階		50頭段階へ				総頭数61頭	

() 内は分子が台数、分母が所有農家数

第4図 ⑤番農家

(単位・百万円)

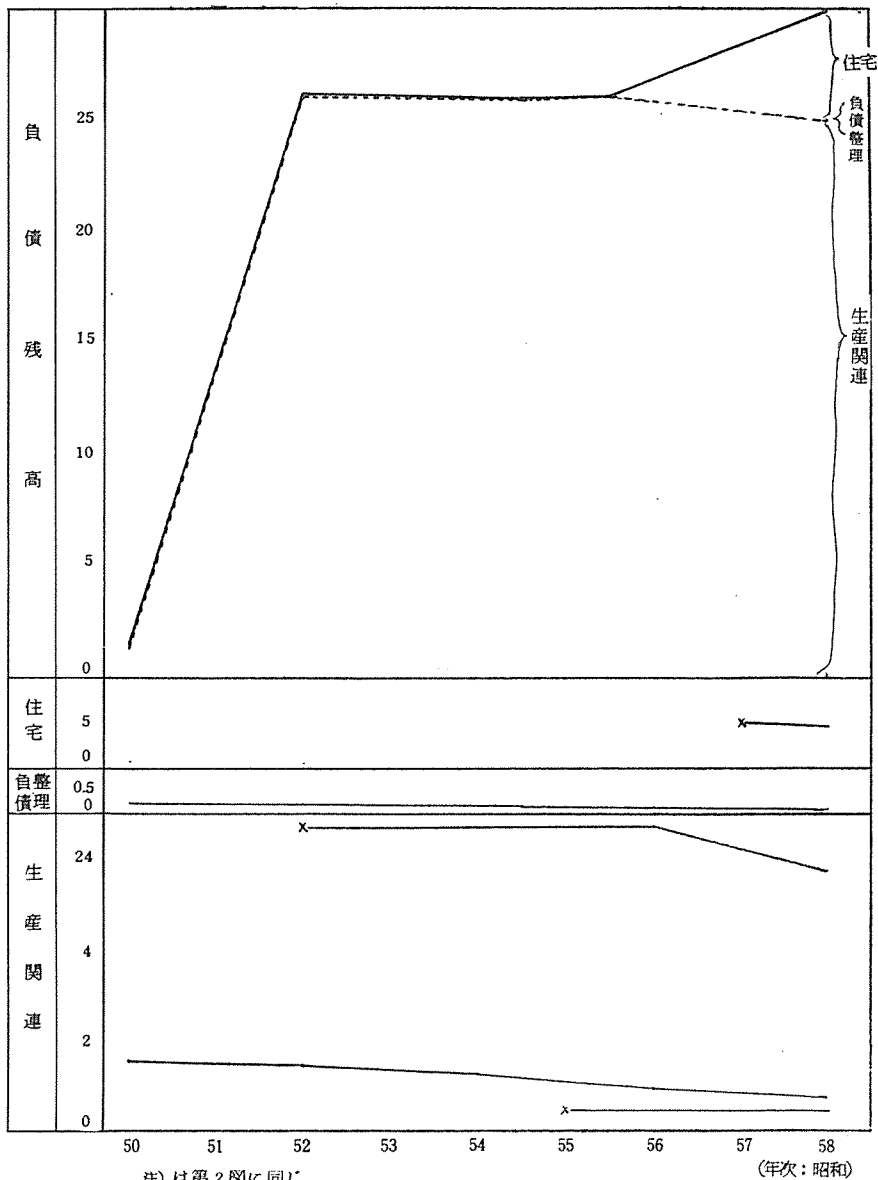


第4図付表

年	50	51	52	53	54	55	56	57	58
機械	トラクター(1/1)	トラクター(1/2) プランター(1/2) ハロー(1/2) テッター(1/2) ライム ソー(1/5) ポテトハーベ スター(1/4)	トラック (1/1) コンサト ペラー (1/2)	ビーンズレ ッシャー(1/1)	ブロードキャ スター(1/1) レーキ(1/1)			トラクター (1/1) テッター(1/1)	
施設					サイロ				
土地									2.04a借地
家畜			総頭数は常に25頭くらい					総頭数	

第5図 ⑦番農家

(単位・百万円)



第5図付表

年	50	51	52	53	54	55	56	57	58
機械			トラクタ- $(\frac{1}{1})$ プラウ $(\frac{1}{1})$	ダンプ $(\frac{1}{1})$ モア- $(\frac{1}{2})$	ロータリ- $(\frac{1}{1})$ テッター- $(\frac{1}{1})$	プランター- $(\frac{1}{1})$	ベラ- $(\frac{1}{1})$	ハロ- $(\frac{1}{1})$ カルチベータ $(\frac{1}{1})$	
施設			畜舎・サイロ パイプライン ミルカー						
土地									7.0 ha購入
家畜		総頭数35頭	酪専化	総頭数50頭				総頭数75頭	

() 内は分子が台数、分母が所有農家数

3. 今後の課題

これまで、負債の累積過程をいくつかの類型に分けてみてきた。

では、いったいこの類型差はどこから生まれるものであろうか。対象農家のほとんどが同時期に酪専化したり、規模拡大を行なっている。にもかかわらずその結果負債整理のための資金が必要になるものもあれば、短期資金を全く必要としないものもある。

そこで今後は、なぜ前者のように生産基盤を拡充しても、さらに負債整理のために資金を重ね入れて行くことになるのかを毎年の再生産・生産力といった局面で考察して行くことにする。

注

- (1) 天災関連の資金として扱ったものは、天災資金のみである。

住宅関連の資金として扱ったものは、住宅資金、年金被保険者住宅資金である。

負債整理関連の資金として扱ったものは、酪農負債整理資金、負債解消資金、酪豚推進資金、自作農維持資金である。

上記以外のものについては、ほとんどが生産基盤拡充、運転に向けられているものと考えられ、生産関連とした。

- (2) 酪農専門化の理由として、昭和49年、50年の冷害と乳価の上昇をほとんどの農家が挙げている。